
消える魔術師

雨漏和馬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

消える魔術師

【Nコード】

N2635J

【作者名】

雨漏和馬

【あらすじ】

おかしな人として認識されている夢盛幸太郎は普段からマンガや小説に読みふけることもあったり、昼寝や夜寝したり、ときには食事をとらないでせかしたりと毎日の生活が全く規則正しくないぐうたらぶりに助手の西村ヒロ（夢盛のことは迷探偵と思っている。）を毎回のように頭を抱えながら困らせていた。普段は探偵というよりもただの街の便利屋としてに位置で片づけられていたが、そんなある日のこと、いつもどおりの日々だったはずだが、1本の殺人予告を告げる電話が鳴り、さらには殺人予告の手紙まで送り付けら

れた。助手であるヒロは恐怖に陥ったが、当の本人は知性的な事件の匂いがすると非常に喜んで狂喜乱舞していたが、次の日になるといつも通りの日々を繰り返すばかりであった。

くプロローグくいつもの日常(1)

皆さんは探偵という職業を知っていますか？通常、シャーロック・ホームズや明智小五郎がびしっと仕切つて事件を解決するという小説ではかつこいい役柄として有名ですね。他のミステリー小説やドラマなどでは探偵が出ると場の空気が締まっていい感じに終わりますよね。

では、実際の探偵さんはどうなのか？と思いますよね…実は、私、西村ヒロもそんな探偵事務所の助手をしているのですが、正直なところを言うとなだの非常識なダメ人間としか思えない人です。ですが、私の遭遇したある事件をきっかけに少しは頼りになる人だと感じました。ただ、正直な話、私の知っている探偵は事件を解決する時でもいまいち締まらない気がします。そんな探偵夢盛幸太郎の話です。

「ねえ？ヒロさん。ホープ軒のラーメンを頼んでくれますか？」

私が定刻通りの9時に夢盛さんの自宅兼仕事場に來た早々で目にした光景はいつもの真つ黒なサングラスに何故か農家の人が今から作業をやりますと言わんばかりの服装でとろけるような口調で私に言うてきた。夢盛幸太郎という名前を返してほしくらいだ。

「いい加減、自分で出前を頼むということも覚えてくださいよ…」

私は頭を抱えながら、電話帳を探していた。

「それは無理です…」

「まあ…確かに11時開店だからね。あそこの店は…」

「いえ、そつちじゃなくて。こつちの問題です。」

夢盛さんが右手の親指と人差し指が丸く輪が作られた。この人は相当の阿呆だ。

「何でないのですか？2週間前の猫の報酬で20万貰ったじゃないですか？」

「たいしたことないけど、一度成金体験を試みたくて5〜6万円ほどは昨日の夜に焚火としてそこにまだ片付けていない燃えカスが残っているよ。」

夢盛さんの指さした先には真っ黒焦げの物体（おそらくこのうちのどこかに混ざっているとは思うが）が風に吹かれて宙に虚しく舞っていた。私は頭痛がさらに増してきたような気がする。ため息が深く、深く出ていく…

くブローグくいつもの日常(1) (後書き)

こんばんは。投稿者の雨漏和馬です。この小説は推理嫌いでも肩肘を張らないような作品にしていくつもりなので、あまりミステリー方向には期待をしないでください。

ですので、事件の話を推理するのも良し、主人公をはじめとするキャラクターで楽しむのも良し。とにかく、楽しんでもらえたら僕はそれで充分だと思っています。

あと、始めのほうにちょっとしたパズルみたいなものを用意するのでもそれも合わせて考えて楽しみにしてください。この企画は今回はやっていますけど。

何かあと、感想などがありましたたら…いつでも歓迎します。

「プロローグ」1本の電話は来るとおかしなものだ。

「で、あとの15万はどうされたのですか？」

夢盛さんがとても有意義に使うとは到底言いきれないけど、いちおう聞いてみた。

「そのうち、8万円はこっちにあるよ……」

夢森さんの指さした方向には綺麗な彫刻が施された、他のボロ施設がウソのようなガラス付きの本棚が据えられていた。何時の間に購入していたのか私にも分からなかった。だが、本棚の中身をよく見ると、マンガや小説の類だらけで探偵ものの資料が全くとっていいほど収まっていない。

「夢盛さん、何でマンガや小説の類だらけで資料類はないのですか？」

何となく嫌な予感はあるが、そのまま素通りできない性分の私は恐る恐る聞いてみた。

「ああ、それね……それは僕がいつでも好きな本を読めるように置いた本棚だから、別に必要のない本は隣の部屋にあるよ！」

「あんたの職業は何だと思っているのじゃあ！」

私の心の叫びがそのままセリフとして現れた瞬間だった。

「それで、その残りはどうされたのですか？」

完全に怪しい匂いだが、かき集めて、私が管理すれば2週間の生活を持たせる自信がある。

「それがこれだよ……」

夢盛先生がある1枚の紙を私に渡してきた。

「4 4 4 4 4 5 9 9 5 5 5 5 6 6 6 6 8 5 5 5 5 1 1 1 1 2 2
2 5 5 5 5 5 4 0 0 0」

という数次の長い羅列が表示されていた。

「たぶん、ここに隠したと思うけど……」

「隠したこともぼんやりですか……」

「今日の起きた時にこの紙がひらひらと舞い降りてね。」

それは俗に言うただ単に落としただけだとは思うが、とにかくこの暗号を解くしかなさそうだ。やれやれな話だ。困った人と言う病気でもこの方は非常に重症であろう。

私はその紙をしげしげと見つめた。数字の羅列とはいえども、同じ数値が規則的に並んでいるということはその数字自体にも意味をなしているということになる。

「夢盛さん、携帯電話とがあります？」

携帯電話でなら簡単になから数字に変換できるシステムが使えるはずだ。

「あることはあるけど…通信料は止められているよ。」

前言撤回。この方針はなさそうだ。通信機能を使えない携帯電話の半分からいは生きていないものと同じだからだ。

そのときだった。いつもなら、絶対に鳴らないはず（通話料を止められているから）の電話からこの部屋とは似つかない「ぞうさん」のメロディに載せて響いた。とっさに近くにいた私は疑問を持ちながらも電話を取った。

「夢盛さんのお宅でしょうか…」

皺くちやに枯れたようなおばあさんのような弱い声が聞こえた。

「はい。こちらは夢盛探偵事務所ですがご依頼でしょうか？」

「私はこれから、殺人予告をします。」

え？冗談にも程が過ぎる。しかも殺人予告って…

私の動揺とは対照的に枯れた声は低いトーンを保ったまま、何事もなかった口調で続けた。

「殺人予告は今日の夕方には手紙が到着しますので、詳しくはそれを見てください。」

私の頭の中には低いツバメが渦を巻いてくると私が翻弄されていく。

「では、またお会いで来ることを楽しみにしています。」

それだけのことを言うと、電話が切れた。私の頭の中身はさっきま

では何か違う気がした。手や足が震える感覚を感じた。胃がひっくりかえるような重たさを感じた。

「ねえ？もうそろそろじゃない？ポープ軒の開店時間まで。」

そんな夢盛さんの言葉さえ遠く感じるような気がしたそんな自分が怖かった。

依頼は事件の香りを予感させるもの。

「ふーん。結構お茶目な人だね?」

私の心をなだめようという説得の元でホープ軒のラーメンを奢らせるハメになった私の目の前には湯気を出しているあっさりとおつ醤油ラーメンで評判のラーメンだ。だけど、そんな食事を目の前にしてもあまり食欲が出ない。最大の原因はあの電話のせいだ。

そんな私を尻目に大盛りをしゃあしゃあと頼みやがった夢盛先生はご機嫌な様子だった。そんなときに出てきた話題だった。

「どこがお茶目ですか?立派な犯罪者じゃないですか?」

犯罪予告を電話ですするという時点でお茶目の世界を超えて、恐怖の世界を感じる。

「わざわざ殺人予告なんて普通はありえないよ。ましてや今から人を一人殺すという恐怖に怯えていないのが逆にうまさ…いや、面白さ120%というところかな?」

「ラーメンを啜りながら言われても全然説得力がないのですが。」

夢盛さんはラーメンを一生懸命すすりながら、すこしズズズという啜る雑音が混って喋ってくるから聞き取りづらい。

「*?+,%!」

ダメだ…ラーメンのスープを口の中で含んでいて、何を喋っているのか全く分からない。

「それに夢盛さんですよ。私じゃなくて…何かの知人ですか?」

「その線はないね。なにせ、学生時代や社会人時代の友達の今は何をしているのかさえも知らないしね…ってそこは笑ってほしいのだけどなあ。」

それはそれで悲しい気がする。少なくとも笑える状況ではないと思う。

「ところで、昨日のことをやっておいてね…」

どうやら、少しはやる気を出してくれるみたいだからほっとする。

「僕はその間に活性化している脳を眠らせる準備をしないといけないから。」

「少しは真面目に取り組まんかい！」

本日2回目の心の叫びだ。毎日、最低で4〜5回はこの言葉を叫んでいる気がする。

「これ以上僕の脳を活性化して何をするつもり？」

それが脳の活性化100%だったらおそらく夢盛さんの脳はモルモット以下になるだろう。

「一応、迷探偵だから少しはマシな事件を解決しなさいよ！これじゃあ、ただの町の便利屋みたいになっていないじゃないのよ！猫を探してくださいだの、蜂の巣を駆除してくださいだのいろいろと頼みすぎなの！」

「あのさ、僕は名探偵であって……」

「名探偵でも、迷探偵でもどっちでも私はいいの！ぐーたら、ぐーたらとしないで少しは私の理想としている探偵みたいにびしっと決めてよ！」

そのとき、サングラス越しに夢盛先生の目が光った。

「その探偵らしくというのはシャーロック・ホームズとか明智小五郎みたいな世間でいうと探偵はものすごくかつこいいという分類のもの？」

「そこまでとは言わないけど、せめて浮気調査の依頼とか何か探偵らしいものを解決してほしいの。」

「僕にはそんな依頼には興味がないね。もっと知性の匂いのするれっきとした完全犯罪を……」

「調査したいなら、まずは知性の匂いのしない事件をいくつか重ねてからね。」

夢盛さんが少し興奮気味に話すところをなだめるように私はもってもらいしことを言ってみた。

「だったら、さっきの電話はどうなの？私としては今までよりよっぽど有意義な依頼とは言いにくいけど……事件じゃない？」

「もう少ししたら届く紙を見てからかな？」

確かにそれは言えていることだった。電話のみだったら、いたずらの可能性も十分にあり得るからだ。少し声を枯らせば、誰でもあの声は出せそうだし。

「それはともかく、そろそろ昼の再放送ドラマの坂本ジョージ君が出る奴がやるからそれを見てからまた始めようか！」

「あんたはミハーなおばちゃんじゃないだろ！」

この迷探偵はどれだけ迷走を続ければ、正規の道に戻れることなのか非常に気になってしまう。

（読者への挑戦状1）

次の公式が当てはまるとする。

日本＋フランス＝5

アルゼンチン－日本＝1

日本×アルゼンチン＝6

オランダ÷フランス＝1

この法則に従って次の計算をしなさい。

アルゼンチン÷オランダ＝

依頼は事件の香りを予感させるもの。（後書き）

「消える魔術師」を呼んでいる皆様こんばんは。投稿者の雨漏です。前回はサボってしまいましたけど、今回からあとがきをまた書こうかな？と。何か、感想やツツコミなどは機会とかあれば、こんなところでも紹介していきたいと思いますのでどしどしお寄せください。

さて、今回から本編を始めていきますが犯人の殺人予告は実際には出来るのかなあ…と。（電話局とかが特定の位置を把握されますしね…）まあ、無理でしょうね。これから、事件を書いていきますが、相変わらず夢森さんは自分の世界を作っていくので、自分で書いていて羨ましく感じるのですよね。

友達からはここで完結したら？と言われますが、

「超展開すぎてワロタ」

みたいなツツコミが来そうだし、まだまだ書き足りないので続けますから安心してください…

今後もよろしく願いしますね。

手紙の血の匂いは普段はしないものだ。

近くの電気店で再放送ドラマを見ていたが、どこが面白かと思う私を尻目に夢盛さんは涙を流し続けた。正直言ってくだらないコメディドラマのどこに泣きどころがあるのかが知りたい。知っている人はぜひともウチの迷探偵さんと対談してほしいものだ。あと、その電気店の人ごめんなさい。

「うん。さてと、健康優良男児はそろそろ寝ないとニューロンの数が減ってしまいそうだ。」

ドラマが終わり、すつくと立った夢盛さんの肩を私はにっこりと笑ってこうなだめた。

「ニューロンの数はどうでもいいですから、夢盛さんはもっと仕事をすべきだと思います。」

夢盛さんの家に帰り、ポストを覗いてみると、3枚の手紙があった。2つはガスと水道を止めましたという文が綴られていた。どれだけ貯め込んでいたのかが逆に気になる。

もうひとつは宛先も何も書いていない封筒だった。何だろうと思い、その場で私は封を切った。

私は次の瞬間、季節は冬の初めのはずなのに汗がたらたらとかき、手や足は身震いする形でその場で突っ立っていていた。

「おい。どうしたの??」

私は夢盛さんにその手紙をそつと渡した。血で描いてある文は自分は恐怖を体感したことはないが、こういう感情になることを知った。文の中身はこうなっていた。

「夢盛様こんばんは。今日はあなたに挑戦状を挑みに書いてみました。私は貴方様の街の住人のうち5人を消し去ってしまうでしょう。貴方様にはぜひともこのトリックを見破れるという自信が御有りでしょうが、私は今まで100%の成功率です。この挑戦に貴方様が敗れた場合には私が貴方さまを葬り去ることになるでしょう。第一

の事件は3日後の夜7時ごろ、アトラクタ遊園地内ということを発表しておきましょう。それではお会いで来る日を楽しみに待っています。」

さらに私と夢盛さんの敗れた姿の落書きのような端折った画が添えられていた。

「面白いよ…この事件は絶対に知性の匂いがするよ！」

私とは対照的なこのセリフは夢盛さんだ。手紙をみた夢盛さんはそこら中を飛び回って何をいつたいしたいのかさえ不明な状況にまで興奮していた。夢盛さんはどうやら挑戦するみたいだが、私は一抹の不安を感じる。何かに巻き込まれているような気がしてならなかった。私の勘違いとは思いたい、あの文章を読んだときに来た恐怖感は文字だけでは伝わらないような緊張感が漂っていたような気がしてならなかった。

翌日、私はいつものように出勤しながらも昨日のあの手紙のことが引っかかり、あまり区分は不安の気分では無かった。私は夢盛さんの施錠しない無防備すぎるドアを開けて目が点になった。そこにはマンガを読んでいる夢盛さんの姿があった。

「おはよう。今日はマクドのサンドイッチでも食べたいなあ。」

いつものぐーたら夢盛さんだ。

「少しはものを考えてから言いなさい！」

私は近くにあったスポーツバックを掴んで、夢盛さんに向かって投げつけた。

手紙の血の匂いは普段はしないものだ。（後書き）

いきなりですが…読者の挑戦は5回に一回くらいにしますね…じゃないと頭が持たない気がするね。ゴメンナサイ。

事件の最初はバス停から

事件予告当日の朝がやってきた。私は夢森さんと10時にアトラクタ遊園地行きのバスのあるバス停に集合するという約束だった。バス停までは10分も掛らないところにあるので、私はゆっくりと出てしまったせいで5分遅刻してしまった。コンビニで週間JUNJUNを読まなければ……と私は今更のように後悔をしてみたが、バス停には誰もいなかった。普段は怒らない人でも時間には厳禁だったのかと自分で納得をして、引き返そうとしたが、少し思い立って夢森先生の家の方へ向かっていった。別に何かを感じたわけではない。ただ、先生は昼過ぎまで起きない日もあるからだ。携帯も卓上電話も留められている先生の家は実際に見に行かないと、どうなっているのかも分からない。それとも先生が事故に見舞われたという線も捨てきれなかった。いずれにしろ、私は固唾をもむ気持ちでバス停の左角を曲がって、夢森先生の方に向かった時、私の方が一気に垂れ下がってしまいそうだった。

「ミヤミヤミヤーミヤーミヤミヤー」

「ミヤーミヤーミヤーミヤーミヤー」

1匹の猫と先生がお互いに一点を見つめあって、まるで会話をしている光景はとてもシュールすぎた。私はツツコミどころが多すぎて、何もできなかった。

「ミヤミヤーミヤーミヤミヤー」

「ミヤミヤミヤミヤミヤミヤ」

そう言う、猫は家の壁の隙間に走りこんで消え、先生は猫に手を振りながらその様子をずっと眺めていた。そして、後ろを振り返ると、ようやく私の存在に気が付いてくれた。

「ああ……ヒロさん。じゃあ、早速だけど行こうか。」

夢森先生は何事もなかったような顔で私を促した。

「いや、そんなことを言われても、何ておかしなことをしていらしたのですか？」

あの光景はおそらく記憶に一生残ってしまいそうだった。

「は？ただ、単に最近飼った猫のジエパン又が縄張りを荒らしていて困ったから、相談に乗っていただけだ…」

何の躊躇もなく話す先生。実に恐ろしい人…

「そういう行為は世間一般では変人扱いをされますよ。宇宙人がいたら同じくらいね。」

「え？ねこと会話できるなんて世間一般では普通じゃないのか！」突然、驚かれたように言うが、私としては猫と喋っているほうに驚いた。

「残念ながら、普通じゃありません。」私は少し突き放しながら強めに言ってみた。

「猫と話すことは万国共通の話題かと僕は心底思っていたのに…だから、大学時代の友達からいつも熱があるのじゃないか？と言われたりしていたのか…」

がつくりとうなだれる先生ではあるが、私としてはごくごく一般的なことしか言っていないかった。決して特殊な話はしていなかった。ただ、先生が大多数の一般人ではないことが改めて証明された一面でもあった。

「さあ、アトランタ遊園地に行きましょう！！！」

私の掛け声にアブラムシよりも役に立たなくなっている干からびた先生はペットボトルをそこら中探していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2635j/>

消える魔術師

2010年10月11日17時30分発行